

0 歳児産休明け保育のスタート

わかたけ保育園
山本英子

私立保育園「園長会史」に記事を載せる等おこがましい事と思うけれども、30年を経た今、記録を残しておきたいとペンをとった。

昭和37年、当時は産業の高度経済成長政策がとられている頃で、子どもを預けて働きに出る母親が急激に増えた時代であった。母親が外へ外へと目を向けるようになり、必然的に育児の対応に苦慮せざるを得なかった。

近年は、男性の育児・家事への参加が広がりをみせているのに比べ、以前は女性が結婚して子どもを産むことは、「子はかすがい」の言葉に裏づけられるように、女は家事に専念するもの、夫に尽くすもの、家に忠実であるもの、また、労働力だというのが世間の通念であったから、産後3週間の「帯あけ」という日が過ぎると日常の生活を強いられた。

そんな中で比較的男女差の少ない教員や公務員であっても、産休あけで出勤するためには、育児と家事との負担に大変苦労したと思う。まして0歳の頃は、子どもの意図するサインを受け止められず、手をつけられずにウロウロしている母親が多かったように思う。

子どもの教育に関心を持つお母さんたちのグループの中で託児施設についての話題が生まれた時、産休明けから預けられる保育所は是非欲しい、ならば皆が育児の経験者なのだから、自分たちの手でもできるだろう、ということになった。

場所・資金等たくさん問題はあったが、幸いにも現理事長・山本経松が先祖から受け継いだ土地の一部を整理した上、木造2階建の園舎を建設してくれた。それから、終戦後の苦しい生活を切り抜けてきた母親たちのバイタリティで一気に保育室の整備に取り組み、同年5月、私たちの無認可保育所はこうして生まれた。

板橋区においては、公立4私立26あったが、0歳児を受け入れる保育所は皆無だった。それでも0歳児の入所希望は年々多くなり、個人住宅を改造しただけの大変粗末な保育所でも非常に喜ばれた。1、2年経つうちに、福祉事務所等からの働きかけもあったが、個人では解決できない問題もあって、社会福祉法人の認可保育所として新たな出発をすることになった。

この段階で先輩の保育園をたくさん見学させていただいた。松葉保育園、茂呂塾保育園、友和保育園 etc. 施設はそれぞれ立地条件により特徴があったが、園長先生の、そこに根をおろした保育に対する情熱には、今も熱くなる程の感激と勇気が与えられた。更に、我が子が4年間保育して頂いた平和保育園園長田中知三郎先生には手をとってのご懇切なる御指導を賜った母親たちが、最初に話し合った「保育所は、家庭が貧困であると否とにかかわらず、保護者もしくはこれに代わる人が、その監護すべき乳幼児を保育できない場合はこれを対象とする。即ち、すべての児童を差別なく育成するための施設である。」又、「地域の文化的根拠地となる。」との理想を掲げ、産休明けから受け入れるために半年かけて準備した。理事長の個人住宅一棟

を基本財産とし、宅地を担保に「社会福祉法人わかたけ会」を設立し、2階部分を増改築して、昭和39年11月3日、若竹が大地の底から真っ直ぐに天に向かって伸びるように、わかたけ保育園と命名した。産休明けから就学前までの保育園はその第一歩を踏み出した。

2歳未満児8名、2歳児9名、3歳以上児43名の定員のところ、0歳児が2歳児の定員に食い込む形でのスタートであった。

10坪足らずのところからプレハブのホールができた時、又、ここから何人かが巣立ち、又、認可保育園として「文化の日」に開園、すばらしい好天の開所式に見た皆さんの笑顔は脳裏に焼きついている。

当時は保母1名に8名の乳児という基準に保育室の中にはハンモックを張り、あやしないうちの子に食事をさせたりした。ないない尽くしの運営に誰一人不満もなく、裁縫具や大工道具をいつも手元におき、模様替えも皆保母たちがおこなった。環境の工夫、安全、清潔は勿論、スキンシップを大切に。集団保育だが、家庭における育児を私たちの方で近寄って、それぞれの家庭環境や育児方法を取り入れ、個々の特性を活かせるよう父母との対話を大切に。保育を心がけ、信頼第一とする、モットーにした。

今は働く女性労働者の問題として何時間勤務などと言われているが、当時は、その事よりむしろ親子の生きていくためのあらゆる問題が保育所にかかっていたように思う。早番、遅番、休日勤務等は全部当たり前と受け止めた。暮れ、正月、夏休み等働く母親たちには全くなかったけれど、職員の休日は快く受け入れてくれた。

預ける側の母親、バザーや催しへの協力を惜しまなかった地域の方々、迷った時や困った時にいねいに指導してくれた先輩の園長会の先生方。そんな多くの方々の理解なしには続けてこれなかったであろうわかたけ保育園であるが、他の私立保育園と共に、地域や働く母親、一緒に生活する子どもたちのためにこれからも役立っていきたく願っている。

奇しくも丁度30年目にあたる11月、高齢者に対する配食サービス等の拠点として「ふれあい会」が発足し、保育園の給食室・設備の利用などの交流が始まったことは、保育園の地域に根ざす今後のあり方にも、一つの方向性をもたらすものであると思っている。

いろいろ記したが、これらの事は、皆、先輩の保育園の先生方のなされたのを私どもの園がほんの一部実践したのであって、今更ながらに御指導に感謝している。そして、一緒に働かせていただいた一人として、板橋区私立保育園長会及び各私立保育園が今後も発展していくよう祈りながらペンをおきたい。